
故郷を目指して・・・

unrealnext

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

故郷を目指して・・・

【Nコード】

N6147T

【作者名】

unrealnext

【あらすじ】

果てしない戦いの果てに提督たちを待っていたのは……………
r - t y p e t a c t i c s の二次小説です。

微かな光を頼りに私達は帰ってきた。そう、帰ってきたのだ！我々の愛すべき故郷、地球のある太陽系に。

しかし、何かが少なかった、違った。そうだ、本来なら此処にあるはずの防衛艦隊や施設、軍港がないのだ。もしやバイドに襲われたのかと思ったがすぐに違うと判断する。なぜなら残骸が一切無いのだ。汚染により消えるにしても全てが無くなるのはあり得ない。それに汚染されたにしてはバイド係数が低すぎる。

私は、いや私達は不思議に思いながらも「要塞ゲイルロズ」に向かうことにした。もしかしたら拠点を移動したのかもしれない。本当なら一直線に地球へ帰りたいのだが情報が少なすぎた。それに通信が一切ないのもおかしい。今の私達には情報が少なすぎた。

私達は驚愕している。なぜなら此処にあるはずの「ゲイルロズ」が無いからだ。それにそれだけではない、「ミッドアイトナイ」を飛ばして情報を収集させた結果恐るべきことが判った。「グリトニル」や「オベロン」、「火星都市グランゼーラ」も無いのだ。

私は自分の中から大切な何かが崩れていくのかが判った。やっとの思いで帰ってきた此処は私達の故郷ではなかった。私は、わたしは、ワタシは、ワタシハ、ワレワレハ・・・いや！まだそうと決まったわけでは無いもしかしたら安全となった為みんな地球にいったんだ。そうだ、そうにちがいない。ならやることは一つだ。地球にかえろう。

全力で地球に向かった私達は邪魔だったので地球の衛星軌道上にあった建造物を押し壊した。中から人の様なものが大量に散らば

ったがそんなものは知らない、我々が地球から出たときにはこんなものは無かった、だから今も無い。今もナクテいい、ナイほうがい。

自分達のすぐ真下にある地球を見下ろす。すぐにも降りて行きたかったが今は夜だった。できれば私達は朝、夜明けと共に故郷に帰りたいかった。だから少し待つことにした。ああ、早く帰りたい。

・・・やつと朝になった。さあ、戻ろう。

大気層を抜けて海面の近くまで接近する。水に映った空を見て私はこみ上げるものを感じた。

太陽の光、風の匂い、青々とした空、地球で暮らして居たときは当たり前だと思っていたものがこんなにも素晴らしいものだと思ひもしなかつた。故郷に戻ったら軍を辞めて田舎に家を建てて暮らすのもいいかもしれない。

そう思つた時だった。

警報が響く、どうやら敵襲らしい。偵察機の報告によると敵の戦力は21世紀に作られていた空母や護衛艦に酷似しているらしい。

ああ、またか。衛星軌道上にあつた建造物と同じあつてはいけなものかまた出てきた。そんなモノはアつてはいけナイのだ。それに我々は此処まで来たんだ。此処まで！邪魔をしようというなら排除するまでだ。発進していくR戦闘機を見ながら私は

「邪魔する物は殲滅せよ！一切残すな！！」
と叫んだ。

「！？、何かが突つ込んでくる！」

それを最後の通信にして国際宇宙ステーションは崩壊した。始めは隕石か何かか来たのかと思つたがその考えが誤りだとすぐに気づいた。隕石ならば衛星軌道上に停止するなどということが出来るは

ずがないし、迎撃の為に撃ったミサイルを迎撃するなんてことも無理だ。

それに私は今、自分の目を疑っている。光学映像により拡大されたそれはとても醜悪な形をしていた。棘のような物がいたところから突き出ており常にそれが動いているのだ。その他にも血の様に赤い色にも吐き気を覚えた。あれは全ての生命を冒流している、これ以上此処にいさせてはならない。

そう思い、全艦隊に攻撃命令を下そうとしたその時に醜悪なそれらから戦闘機と同じくらいの肉の塊が出てきその直後、紫色の光が奔った。光が収まり前を見ると本艦のちょうど前にいた護衛艦「ジヨーズ」

と「あかつき」の艦橋が消滅していた。

「！？全艦、攻撃開始！！」

虐殺が始まった。

これで五つ目の防衛ラインを突破した。

やはり、此処の部隊もとても弱かった。こんな力でバイドを撃退できると思っているのだろうか？

20隻近くいた護衛艦と空母、そして200機近くいた戦闘機を落とすのに5分とかからなかった。彼等が使っていた戦闘機は一機として慣性制御が出来ない、それどころか光学兵器すら搭載していない旧式のもので、護衛艦も「エーギル」級と比べたら遙かに性能が低く、たった2隻だけしかレールガンを搭載していなかった。

あともう少しで私たちが育った土地に帰ることが出来る。そう、あとスコシで・・・！？

突然前方にワープゾーンが作られその中から出てきた物を見て私達は歓喜した。

見たこともない白色の神々しさを感じさせる戦艦が4隻 私たちが乗っているのと同じ物の「ヘイルダム」級が2隻 赤い鼻が特徴

的な「ガラム」級が4隻

そしてその中から出てくるR戦闘機が多数出てくる。

やっと彼らに出会えた。しかし何故だろうか？彼らを見ていると仲間だというのにも関わらず底知れぬ恐怖を覚える。

しかしその疑問はすぐに解消した。なぜなら彼らが一番初めにとつた行動が通信ではなく我々に銃を向けて来たからだ。元から彼らは私達を殺しに来ていたのだ。戦力差は激しいがすることは一つただ殲滅するのみ。私は泣きながら彼らを破壊するように命じた。

ワープアウトをすると其処に奴らがいた。あの忌々しい化け物どもは別次元の地球を襲っていた。碌な抵抗すら出来ない人々をだ。

出撃した全部隊に命令する。

「『コンバイラ』を旗艦とする『バイド』を殲滅せよ！」

既に沈みつつある旗艦「フリーダム」の艦橋からあの化け物共と戦闘を行っている艦隊を見て私は何故か感謝するのではなく激しい嫌悪感を覚えた。これは私の感だがあの化け物とあの艦隊は何かの関係があるのだろうか、でなければ現れてすぐに攻撃する訳がない。戦争をするなら自分たちの場所だけでやってくれ。そう思いながら私は意識を手放した。

戦況は不利だった。彼らが使っている戦闘機はどれも私たちの物より性能が高い後期生産型、もしくはその上位種で、「サンデーストライク」や「トロピカルエンジェル」などといった旧式の物ではついて行けず、奮闘するも一機、また一機と落とされていき、その度に胸を引き裂かれるような痛みに襲われる。戦艦の性能も全て向こうが上で、先ほどから打ち続けているギヤランホルン砲も全て撃

ち落とされている。そしてブルドガング陽電子砲すら耐えるという異常な堅さの白色の戦艦。更にその戦艦が放つ陽電子砲は「ヨルムンガンド」級輸送艦を一撃で消滅させる程の破壊力を持っている。だが、倒せない敵ではなかった。「サンデー 스트ライク」などの強化戦闘機が使用できる亜空間航法システムを用いた奇襲で4隻あった白色の戦艦を2隻残して他の艦を全て墮とすことができたのだ。しかしもう既に我々の戦力は壊滅していた。亜空間に潜れない普通の戦闘機は全てこの奇襲を読ませない為のかく乱として突撃させてしまい全滅し、奇襲した戦闘機も全て残りの2隻と敵戦闘機に墮とされている。

後もう少しだというにも関わらずこのような所で、しかも仲間に殺されなければならぬのか？ナゼ オナ ジナ カマ ナノ ニカ レラ ハワ タシ タチ ニジ ユウ ヲム ケテ クル . . .

後はぼろぼろになった「コンバイラ」を討ち、オペレーターが「コンバイラ」撃破の報告をしてくるのを待つだけだった。が、いきなりそれは起きた。「コンバイラ」が動きを止めたかと思うと軋み始め、そして空間を侵食し始めた。

「不味い！」

そう叫んだ頃にはもう遅かった。肥大に肥大を続け、最早原型が何なのか分からなくなった「コンバイラ」を中心に広がる琥珀色の「何か」に飲み込まれ意識が薄らいでいった。意識が消える寸前、誰かの記憶が頭に流れ込んできた気がした。が、そんなことはどうでもいい、私、いや私達は故郷に帰りたい。ただただ帰りたい . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6147t/>

故郷を目指して・・・

2011年10月8日03時48分発行